

# AT THE NIGHT

written by HADEYA

## 1

「利恵、俺を愛してるか？」

松島裕也の声は震えている。

「愛してる。裕也は私を愛してる？」

少し間を置いて松島は告げた。

「……愛してる」

## 2

都営新宿線(瑞江駅)前のベンチに座り、松島はスマートフォンで水原利恵と話している。深夜。人通りは少ない。煙草に火を点けた。この三時間で七十二本目の煙草だった。そのまま五分ほど利恵と会話を続け、通話を切った。今、松島は極限状態にある。後にも先にも怖いと感じたのは初めての事だった。

七十三本目の煙草に火を点けた。煙草に困る事はない。リュックには残り七箱の煙草がある。これだけあれば充分だ。とにかく煙草が吸いたい。吸わずにいられない。二時間後には最愛の女……未来の妻、利恵と俺は会っている。関西へ逃走している。逃走して隠遁生活を送る。考え方によっては最高の人生かも知れない。考え方によっては最悪の人生かも知れないが。

再びスマートフォンが振動した。相手は利恵だった。

「い、今、大丈夫？」

利恵は怯えている。本当に怯えてるのがヒシヒシと伝わって来る。

「俺も怖い。こんなに怖いと感じたのは初めてだ」

「どうなるの、私たち？」

「本当の事が知りたい？ それとも嘘の方が良い？」

「死ぬのね、私たち。連中に殺されるのね？」

「分からない。分かっている範囲で本当の事を話す」

松島は真実を告げた。自分たちが社会的抹殺を施された事を。二度と働けないだけでなく、暗殺される可能性がある事を。

「俺たちは政府の監視下にある」

松島は続けた。

「心して聞いて欲しい。覚悟は良い？」

「話して」

「……政府は——」

俺は打ち明けた。俺自身の憶測を。完璧に辻褃の合う憶測を。

### 3

「———エシュロンを有している」

「エシュロンって？」

「究極の盗聴マシン。電子メール、インターネットの閲覧記録、携帯電話の通話、全て盗聴されてる。人類規模で、だ」

「ど、どうやって？」

「高性能の検索エンジン。この中で最も怖いのは通話記録だ。もし電話の通話が盗聴されてるとしたら俺たちの、この会話も盗聴されてる事になる」

ガタン、と音がした。付近の自転車が風で倒れる音だった。

「本当の事？」

「本当だ。それだけじゃない。Zシステム」

「そ、それは何なの？」

「皆殺し装置。政府はボタン一つで大勢を暗殺できるんだよ。超音波で」

「……あり得ない」

「エシュロンとZシステムを実際に見た奴がいる。旭川市の駐屯地で見たとさ。実際に触ったと言ってるし、彼は開発にも関わっている」

利恵は言葉を失っていた。俺たちは死んだも同然だ。だから関西へ逃げ、隠遁生活を送る。逃げても無駄だが。俺は会話を続けた。

「他にもあるんだ」

「ま、まだあるの？」

「衛星。ビームを放つ。太陽。昼と夜は人工的に作り出されてる」

「……嘘でしょう」

「全部、本当の話だ」

そう。全部、本当の話だ。それだけじゃない。他にもたくさんある。俺は真実を余すところなく利恵に伝えた。

「……絶対にあり得ない」

「信じられないだろうな。俺とて最初は信じられなかった」

「根拠はあるの？」

「利恵。今、タクシーに乗ってるな？」

「だ、だから何？」

「タクシーに乗って、どれくらい経つ？」

「……おかしい」

「銀座一丁目から瑞江。深夜だ。どれだけ長くても一時間あれば着く。ところがタクシーに乗ってから既に三時間半が経過する」

「私も気付いてた。さっきから同じ所をグルグル回ってるの。料金もそのまま」

俺は言った。

「タクシーから降りろ。今すぐに、だ」

## 4

利恵はファミリーレストランへ入った。俺達はまだスマートフォンで通話を続けている。周囲には筋者と思わしき柄の悪い男が五人いると利恵は言っている。

「ヤクザか？」

「間違いない」

利恵は水商売である。見間違える事は、まずない。

「店内にいる。そこが一番、安全だ」

「もう耐えられない」

「落ち着け。俺たちは朝、会う。朝になったら関西へ逃げる。会ったら俺は……利恵を抱くと思う」

「私も裕也を抱く。きつくきつく抱き締める」

電話口から店員の声が聞こえた。食べ物を持って来たのだろう。

「食べるな」

「え？」

「どれだけ腹が減っても今夜だけは何も食うな。水も飲むな」

「わ、分かった。それより、このまま店内にいたら彼らが接触して来るわよ」

「ヤクザ？」

「ええ。百パーセント」

「店にいる。店内で殺人は犯せない。犯せないシステムになってるんだ。俺を信じろ」

「裕也を信じる」

「利恵、すまないが友達に電話をしても？ 別れを告げたいんだ」

「好きにして」

愛してるよ、と告げて通話を切った。俺は電話で友人に真実を告げた。情報を拡散した方が好都合だからだ。友人はこの事実をSNSで撒くと約束してくれた。俺の身に何かあれば情報をバラ撒く、と。

通話を切ると再び利恵に電話を掛けた。対政府の反撃態勢は整った。俺達は反撃に転じた。何が何でも利恵と会う。会って見せる。

## 5

俺は政府職員である。正確には元政府職員である。知ってはならない真実を知り、組織を抜けた。そして現在に至る。組織を抜けた事を知れば暗殺されるに違いない。俺は奥の手に出た。

プラズモイド。つまりプラズマ生命体。

俺はプラズモイドと密に取引を交わした。情報提供の代わりに身柄を守ってくれ、と。プラズモイドは快諾した。家族を捨て、慣れ親しんだ故郷を捨て、俺と利恵は逃げた。逃避行が始まった。

プラズモイドにエシュロンとZシステムを防いで貰った。機密情報をメディアに拡散した上で利恵と会う。それが今の俺に出来る精一杯の努力だ。

俺たちはマークされている。既に暗殺を施されたに違いない。ところがZシステムが作動しないと来ている。政府はあの手この手で俺と利恵の接触を防いでいる。

利恵はファミリーレストランを出て〈大手町駅〉へ向かった。時刻は朝四時三十五分。あと十五分もすれば半蔵門線の始発電車が動き出す。ゲームが始まった。

## 6

「半蔵門線、大手町駅へ向かえ——」

俺は言った。

「どの出口でも構わない。入って切符を買え。買い方は分かるか？」

「さあ、電車に乗った事ないから」

「駅に入ったら切符売り場を探せ。どこにあるかは分からない」

「携帯で調べる」

「調べるな。俺の言う通りにしろ。それから——」

スマートフォンの持ち手を変えた。

「キャッシュはあるな？」

「ある」

「五百円以上の切符を買え」

「高い切符を買って事ね？」

「そうだ。今から言う事を記憶しろ。メモは取るなよ」

「了解」

「住吉駅で新宿線に乗り変えろ。本八幡行き電車に乗れ」

「住吉駅……本八幡行きね」

「ここが重要だ。絶対にホームの傍に立つな」

「ど、どう言う——」

「壁を背に立て。背後から突き落とされなくなる。立つ時は右足を軸にしろ。突き落とされた時、踏ん張る為だ。立つ場所だがホーム中央に立て。階段傍は避けろ。常に人目のある所にいろ」

「りよ、了解」

「下車する場所は分かっているな？」

「瑞江駅？」

「違う」

「違う？」

「大島駅。先頭車両、だ。確実に先頭車両から降りろ。ドアの前に俺が立ってる」

「殺されるかも知れないのね？」

「防いでみせる。絶対に、だ」

「……愛してる」

「俺も愛してる。心の底から」

愛してる。だからこそ——

「守って見せる。俺、ちょっと心配症かな？」

「病的よ」

言って彼女は笑った。諦念を感じさせる皮肉めいた笑いだった。

## 7

「裕也。楽しい話しない？ 明るい未来について」

「今朝、俺の口座から預金が消えた。全額だ」

「私のも……消えたの？」

「残ってるだろう。その代わり、あれがヤバいんじゃないか」

「……あれ？」

「エスとポンプだよ。マエもあるだろう」

「お願いだから怖い話をしないで」

「駄目だ。今日だけは……会うまではタフになれ。連中は本気だ。本気で俺達を殺そうとしている。俺達も本気で逃げるんだ」

「私……私……」

利恵は泣いていた。俺は言った。

「愛してる。お前を守って見せる。負けると言う選択肢はない」

「私たち、誰を相手にしてるか分かってる？」

「派閥、だ。俺達を殺そうとする派閥と組もうとする派閥」

「この会話、盗聴されてるのね？」

「そうだ。これは俺達からの宣戦布告だ。聞いてるな、政府職員。俺たちのスタンスはこうだ」

俺の声は力強かった。

「くたばれ」

沈黙が続いた。不自然な沈黙が。利恵が言った。

「そろそろ駅に着く」

「愛してる」

それだけ告げて通話を切った。俺は早朝の改札へ向かった。空には太陽が嘘臭く燃えている。世界は嘘と虚構に塗れ、おぞましい悲鳴を上げていた。

## 8

予定時刻になっても利恵は現れなかった。

「あり得ない……」

俺は呟いた。つまり、つまり……それだけは百パーセント、いや千パーセントあり得ない。

電車が反対方向へ走った事など。

## 9

利恵が殺されたと言う選択肢はない。何故なら俺は利恵と携帯電話で会話してるからだ。利恵はこの駅のホームの端——俺が立ってるポジションにいる。

「どう言う事？」

利恵の声は上擦っている。

「負けだ……俺達の負けだ」

勝利を夢見て闘った。そして敗れた。敗者に待ち受ける者は一つ。死。

## 10

「裕也、しっかりして」

「……駄目だ。そんな事だけは絶対にあり得ない」

そう、あり得ない。電車が反対方向へ走る事など。俺達を嵌める為に駅を一つ構築する事など。街一つを建設し、タクシーで利恵をそこへ送り込む事など。

「……裕也、聞ってる？」

「き、聞ってる」

「どうすれば良いの？」

「……何かおかしい」

「何がおかしいの？」

「感情だ」

俺は言った。

「感情？」

「コントロールされてる」

「な、何の事？」

「俺たちの負けだ」

負けた。政府に負けた。プラズモイドが負けた。一体、俺たちはどうなるのか。

## 11

「裕也——」

何かがおかしい。極限状態にあるのに恐怖心がない。代わりに喜びが存在する。楽しくて楽しくて、仕方がない。

「私、死にたい……」

利恵が言った。愉快だった。愉快で愉快で最高の気分だった。

「……俺は愉快だ」

## 12

「感情、コントロールされてるのね？」

「間違いない。感情だけでなく、意志も欲望も言動も。何もかも政府にコントロールされてる」

利恵は泣いた。号泣し、嗚咽した。

「泣くなよ、利恵」

俺は笑った。ゲラゲラと。俺達はスマートフォンで通話を続けた。利恵は「さようなら」を告げてホームに飛び込み、そのまま帰らぬ人となった。愛する人を失った俺は……笑いながら……付近の鏡を地面に倒して叩き割り……ガラスの破片を掴んで……自らの顔をザクザクに切り刻んだ……笑いながら……。

この物語は実話である。

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872